國學院大學学術情報リポジトリ

# 縄文時代中期環状集落における建築更新：多摩ニュータウン№72・795・796遺跡,№446遺跡を例に

| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-04-30<br>キーワード (Ja): 縄文時代中期, 環状集落址, 竪穴建物, 建築更新, 形成過程<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉澤, 徹<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.57529/0002000342 |

# 縄文時代中期環状集落における建築更新
## ―多摩ニュータウン No.72・795・796遺跡、No.446遺跡を例に―

吉　澤　　徹

**論　文　要　旨**

縄文時代中期の環状集落址である多摩ニュータウン No.72・795・796遺跡および近接する同 No.446遺跡を例に、竪穴建物の建築更新を分析し集落形成の規則性を論じた。建築更新とは、建築物の設計、建設、改築、遺棄、重複、埋没に至る一連の連鎖的な変更行為にパターンを読み取る分析概念である。本論では建築更新の概念を基に、新たな竪穴と古い竪穴の位置関係、同一竪穴利用回数、重複関係の形成過程を分析し、竪穴構築の場の選択性を既存の竪穴との連鎖的な関係の中で理解することを試みた。その結果、No.72・795・796遺跡で建築更新の規則性が時間的経過の中でも維持される現象を検出し、さらに No.446遺跡の建築更新も No.72・795・796遺跡の建築更新と類似することを明らかにした。集落形成の規則性は時期を経ても継承されていたと解釈した。

キーワード：縄文時代中期　環状集落址　竪穴建物　建築更新　形成過程

### 1．問題意識

縄文時代中期の東日本には、竪穴建物址をはじめとした構築物が環状に廻る定型的な集落遺跡、「環状集落址」が多数形成された。環状に廻る竪穴建物址には度重なる「重複」や「改築」[1] の痕跡が残されており、そこに環状集落址のひとつの特質が表れている。また、その形成期間は数百年に及ぶことも珍しくはない。つまり、環状集落址は長期にわたる形成期間を有しかつ幾度も竪穴建物が構築されたのにもかかわらず、環という一定の規則が踏襲されているのである。したがって、その長期にわたる「環」の規則と踏襲性には，縄文社会の成り立ちに接近するための重要な手がかりが含まれている可能性がある。このような規則的な空間構成の形成要因は未解明な部分が多い。どのような要因によって環状集落址が形成されたのかを解明するためには、その形成過程を多角的に分析しなくてはならない。特に環状集落址の長期的な環の踏襲性を踏まえれば、そこに住まった人々が既存の建築物や建築物址の中で、いかに新しい建築物を構築したのかという分析視点が必要となる。

本稿では、過去より続く集落の場・空間、建築物の連鎖的な利用・改変の仕方を「建築更新」と呼び、一環状集落址群の「重複」や「改築」を対象に建築更新の研究を行う。建築更新から環状集落址の定型性を生み出した要因に接近し、その歴史的意義の解明の一助とする。

## ２．先行研究と課題整理

### ２－１．竪穴建物の更新と「場」をめぐる研究史

**建物の改築**　これまでに、建築物の更新から社会や居住形態に関わる多数の研究が蓄積されている。ここでは、本研究に特に関わりのある先行研究を概観し、課題の整理を行う。

関野克は埼玉県上福岡貝塚で縄文前期の竪穴建物址の調査と研究を行い、竪穴建物に住まう人員の増減を論じた（関野 1938）。特に重要なのは、関野の拡張現象に対する視点と解釈である。関野は「拡張」が居住人数の変化に対応すると考え、Ｄ地点住居址が５人に始まり、最終的に12人まで増加したと考察した。一方で、竪穴建物址の場とその更新に着目し、縄文社会の構成にせまる方法を提示したのは水野正好である（水野1969）。水野は「縄文時代集落復原への基礎的操作」で、竪穴建物が同一位置で上屋の施設を改める建て直し・改築と、位置を若干ずらして建築し直す建て替え・新築の存在に注目した。ここに２種類の「住まいの動き」を看取し、建て直し・建て替えの時空間的な連続的関係である「住まいの流れ」から集団および竪穴建物間関係、そして群別構造の復元を試みた。谷口康浩は縄文中期の長野県大石遺跡の狢沢式期から藤内式期にかけての竪穴建物配置が２大群をなし、改築や重複などの更新行為や建物の型式の差異と配置が、２大群と対応する事実を明らかにした（谷口2002、2005）。竪穴建物の更新が大群ごとに規定されている可能性を読み取ったものであり、集落構造解明の一視点を提示している。小林謙一は竪穴建物の改変過程の分析法を構築し、緻密に変遷過程を復元した（小林1994、1996）。小林は、竪穴建物のライフサイクルから縄文時代の居住形態の解明を目指している。

**建物の重複**　竪穴の再利用や重複といった現象については石野博信の指摘が重要である。石野は、縄文時代中期の関東・中部地域に、同じ竪穴を繰り返し使用する「原位置改築」が集中することを指摘した（石野1990）。それ以降、重複や同一竪穴の再利用の議論が重ねられるようになる。小林達雄は、１度掘り込まれた土では堅固な床や壁が造れないにも関わらず頻繁に重複が起こるのは、そうせざるを得ない社会的規則があるからだと考えた（小林1996、1999）。高橋龍三郎は、縄文中期の千葉県草刈貝塚における初期の廃屋墓が、各分節単位の外縁に位置し後代の竪穴が重複しない現象に対し、新築時の祖先の墓

所に対する意識の表れとして解釈した（高橋1991）。竪穴建物の改築や重複がなぜ起こるのか、その解答の１つとして注目される。石井寛は縄文時代後期の神奈川県小丸遺跡の多重複住居が、前面に墓域と掘立柱式建物址を配することから、集落の長が居住した核家屋と考えた（石井1994）。小林謙一は竪穴建物址の重複関係に注目し、重複の仕方を分類・整理して住居・集落の継続や断絶の考察を行った（小林2000）。谷口もまた竪穴建物址の重複を問題とし、東京都下野原遺跡の発掘調査で目的的に「建物更新」を捉えることを試みた。その結果、前竪穴を踏襲し連続的に更新する「踏襲的モード」から、竪穴の場をずらす「便宜的モード」へと、加曽利Ｅ３式新段階を境に変化する現象を捉えた（谷口2007）。このような議論を経て谷口は、竪穴建物の更新という行為に、家族像や家系・家産継承にかかわる制度が刻印されている可能性を展望した（谷口2009）。

**集落移動論と建築更新**　吹上パターンを生業の季節性と関連させて考察した小林達雄（小林1974）に対し、末木健は遺物が希薄な竪穴覆土の第１次埋没土に着目し、その成因を人の移動による集落の無人状態に求めた（末木1975）。石井寛は竪穴建物の更新の非連続性に着目し、移動論を深めた（石井1977）。従来連続使用とされてきた同一地点で重なり合う竪穴建物址の旧階段の主柱穴に堆積する黒色土に着目し、これを自然堆積土と評価して更新に断絶を認め、一地域内における集団移動の繰り返しを想定した。このような末木・石井の移動論はその後の土井義夫、黒尾和久らによる一時期的な景観の復元の重要性の指摘（土井 1985、1988ａ、1988ｂ、黒尾 1988ａ、1988ｂ）と相まって、環状集落の拠点性・定型性に対する見直しへと展開する。従来の集落研究における形成過程論の不足に対して、その再検討を促した。

## ２－２．課題整理

移動論に派生する大規模集落址の実態解明の手段として、土器型式を用いた集落の一時期の景観復元が進められている（小林1999、小林・大野1999など）。これは環状集落址を論じるうえで欠かせない分析である。しかし、一時期の景観は集落址の形成過程の一断面であり、それを基礎とした議論のみで環状集落址の意義を決することができるのだろうか。一時期の景観を復元する操作では、累積する更新行為の痕跡が分断されてしまい、前後の時期との連鎖的な関係は捉えられない。累積する痕跡の中で初めて意味を持つ現象や事実にも目を向けなくてはならない。そこで、異なる時期の竪穴建物址の関係を連鎖的に分析するための新たな方法を構築する。新たな構築物が、既存の構築物やその痕跡とどのような関係を持ち、どのようにそれを改変したのかという問題に、筆者は着目したい。

本論では、当時の人々が旧来より利用してきた場や、竪穴建物に対する利用・改変行為

に着目し、集落址の形成過程を分析する。建築物の更新を総合的に分析するための概念・方法を構築し、かかる視点から集落の成り立ちへ接近する。

## ３．分析方法

### ３－１．分析概念の設定―建築更新の基礎的な視点と方法―

集落遺跡における建築物や場の更新の分析を行うにあたり、「建築更新」の概念を設定する[2)]。「建築更新」とは、建築物の場の選択、設計、建設、改築、そして遺棄、重複、埋没に至る、一連の連鎖的な改変行為の中にパターンを捉える分析概念である。当時の人々がある時点における既存の建築物や、建築物の痕跡、あるいはその場をいかに処置し、また引き継いでいくのか、その過程の復元を目指す。そこで、当時の人々が既存の建築物や、その痕跡が累積する物質的環境の中で、いかに新しい建築物を構築したのかを捉えるための、形成過程の仔細な観察が基礎作業となる。

建築更新の分析と論証の手続きは次の通りに行う。まず、建築物の更新過程あるいは集落の場の更新過程を復元する。建築物の更新過程を段階化し、変遷を整理する。次に整理された更新過程から行為･所作を復元する。そして、更新過程および行為の連続性の中に、傾向性･パターンを捉える。ポイントは旧来の建築物と新たに構築される建築物の関係を、連鎖的に理解することにある。以上が論証の基本プロセスである。

最も重視したのは､旧来の建築物を改変する行為とそのパターン化に対する視点であり、以下の論考と考え方を参照している。谷口は大形石棒の研究プロジェクトおよび儀礼研究で、行為の反復性と再現性を重視する（谷口編 2012、谷口2021）。それは、儀礼行為が一定の形式に則って行われるために、残される痕跡にも一定の規則性が与えられることに着目したものであるが、その視点は集落址形成の分析でも有効である。溝口孝司による墓域の形成過程の分析もまた参考になる。溝口は墓域を社会的な諸関係を再生産するコミュニケーションの場として捉え、その形成過程から当事者の行為と社会的なメッセージを読み取ることで、弥生時代をはじめとした先史時代の人々の社会戦略にせまる（溝口 1995、1997、2016、2022など）。溝口は考古資料を社会構造の反映としてではなく、社会的再生産に積極的に関与した物的媒体として捉えるのである。本論においても居住の場であるところの集落と、竪穴建物の更新にパターンを析出することを試みる。そこで、竪穴建物の更新順序、すなわちライフサイクルの復元が必要となる。この方向性の研究を深化させたのは小林謙一である（小林 1994、1996）。小林は竪穴建物の改変過程をフローチャートで整理して段階設定を行っており、その手法は現象を操作可能な状態に整理するうえで重要

な方法となる。

なお本論の分析対象は、居住に使用されたと考えられる竪穴建物の立地する「場」の更新である。集落における場の性格を、建築更新のパターンと居住エリアの選択性の観点から明らかにする。

### ３－２．分析対象遺跡の概要

東京都多摩市に所在する多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡、多摩ニュータウンNo.446遺跡は３つの集落址から成り、多摩川の支流である大栗川北側の舌状台地上におよそ300m間隔で近接して立地する（図１）。それぞれ継続期間と規模が異なるものの、関連する一連の遺跡群として同じ俎上で分析することが必要である[3)]。

多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡（以下No.72遺跡と略記）は、中期中葉勝坂１式期から後期初頭称名寺Ⅰ式期まで継続された集落址が含まれ、当該期の竪穴建物址275棟が調査・報告される、多摩ニュータウン地域で最大の集落址である。一部に未調査部分が残されているものの、環状集落址として理解するのが妥当である。多摩ニュータウンNo.446遺跡は、東西２つの環状集落址が含まれる[4)]。東側の環状集落址（以下No.446遺跡と略記）は勝坂２式期と加曽利Ｅ４式期にほぼ限定される集落址であり、勝坂２式期の19棟と加曽利Ｅ４式期の３棟が検出される。西側の集落址（以下No.446－Ｂ遺跡と略称）は加曽利Ｅ２式期の竪穴建物址18棟が確認される。No.446－Ｂ遺跡81号住居跡は攪乱を受けており時期判定ができないが、配置や形態から加曽利Ｅ２式期として扱う。

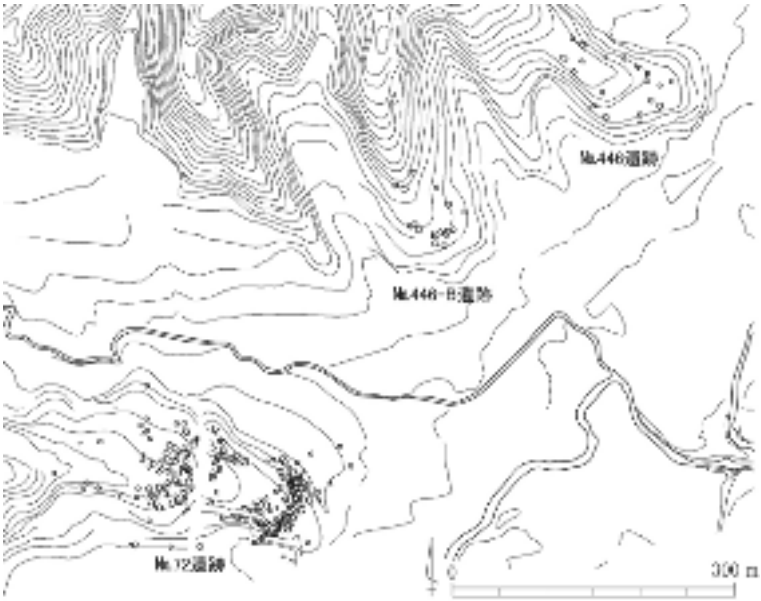


図１　多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡とNo.446遺跡の竪穴配置

現在までに本集落群の研究は蓄積しており、安孫子昭二の３集落を総合的に扱う研究（安孫子2011）は集落間関係を考えるうえで重要である。安孫子は

No.446・No.446－Ｂ遺跡をNo.72遺跡の分村または環境悪化に伴う一時移転と考える。No.446－Ｂ遺跡の調査者である山本孝司は、集落の変遷を竪穴建物址の形態、墓域と関連付けて分析し、南群15棟をNo.72遺跡の集団が立ち上げ、北群３棟に甲府盆地からの移入を想定する（山本 2017)。櫛原功一はNo.446－Ｂ遺跡の酷似プランの竪穴建物址を分析している（櫛原2016)。No.446遺跡は、谷口による集落最初期の竪穴建物配置の研究（谷口1998ａ）や、今福利恵による竪穴建物址と覆土出土土器型式の関係の検討（今福2016）がある。

### ３－３．竪穴の時期決定方法

竪穴建物址は竪穴建物址自体の型式と重複関係から時期決定をすることが望ましい（赤山1982、谷口1998ｂ）が、それが可能なのは特徴的な構造を持つ定型的な竪穴建物址に限られる。多数存在する小型の４本柱建物や定型性に欠くものは、形態による時期判定は困難である。よって、本論では便宜的となるが出土土器の型式と重複関係から竪穴の時期を決めたい。竪穴建物の施設として埋設される土器があれば、その時期を竪穴の時期とする。埋設土器がなければ、土層断面図を参照しつつ極力床面直上のものを優先して覆土出土土器の時期をとる。土器型式編年は、勝坂１式から３式の３期（鈴木1981)、加曽利Ｅ１式からＥ４式の４期（黒尾1995)、曽利Ｉ式からＶ式の５期（櫛原1999)、称名寺Ｉ式からⅡ式の２期区分（今村1977）とする。時期がほぼ並行する加曽利Ｅ式土器と曽利式土器は加曽利Ｅ式土器の４期区分で記述する[5)]。

建物廃絶後に堆積する覆土出土の土器で決定する時期は、多くの場合建物廃絶以降の時期となる。また遺物が希薄な第１次埋没土が自然流入土の場合、その上層に含まれる遺物は、竪穴廃絶の時期とも大きく隔たる可能性がある。重複や反復により覆土が取り除かれてしまった場合は時期判定ができず、長期継続の可能性がある竪穴も一様に廃絶以降の時期推定とならざるを得ない。したがって本文中の「○○式期の竪穴」のような表記は竪穴廃絶後の時期をさし、竪穴建物そのものの時期を示さないことを断っておく。なお複数の異なる時期の土器が埋設されている竪穴は、最も新しい土器型式の時期をとる。

### ３－４．分析方法

【分析１】新築の場と既存の竪穴の位置関係

分析１では、新規に竪穴を掘る場と、それ以前に存在した竪穴の位置関係を検討する。各段階の竪穴の位置を太線、旧段階の竪穴の位置を細線で表示する操作により、新たな竪穴の位置を既存の竪穴との位置関係の中で観察する。竪穴プランが不明な場合は炉の位置を●で表示する。

前提として、何を１基の竪穴として捉えるのか、No.72遺跡の事例で説明する。竪穴の一部が重複する、明らかな断絶が認められる事例はそれぞれ異なる竪穴とする。問題は連続使用なのか不連続なのかが判然としないケースをどう捉えるかである。図２－１は331号住居跡、332号住居跡、341号住居跡として報告される竪穴建物址群の重複状況である[6)]。

331号住居跡と332号住居跡はプランの一部が切り合っているケースであり、この場合にはそれぞれ異なる１基の竪穴として捉える。341号住居跡は332号住居跡の壁面の一部を踏襲するようにして332号住居跡の埋没後に構築されたことが土層断面図から読み取れる。332号住居跡は（埋め戻し、自然堆積を問わず）１度埋没していることが明らかであり、このような竪穴覆土への再掘り込みにより構築された341号住居跡は、１基の竪穴として理解する。

図２－２の56号住居跡は１つの竪穴プランおよび炉に対して、２組の主柱穴群が認められる。竪穴プランの掘り直しといった掘方の更新は認められず同一竪穴が踏襲されている。この事例は、明らかに同一竪穴を再利用しており、１基の竪穴として捉える。２組の主柱穴配置が酷似しており連続的な建て替えも想定できる。しかし、本論では安易に連続と解することは控え、１基の竪穴の２度の利用と捉える。

図２－３の306号住居跡は、周溝の状況から少なくとも３棟の竪穴建物が重なり合っている。土層断面図に掘り込みは確認できず、また周溝３に伴う貼床が旧段階の埋甕を被覆している現象などから、一般的には拡張とされる事例である。確かに、主柱穴覆土などから連続使用が検証可能であれば、この時点で１基の竪穴として即断するが、土層断面図からは連続･非連続を検証することはできない。しかし連続の可能性も決して小さくはなく、旧段階の主柱穴は埋め戻されていると報告されている。仮に断絶があるにしても、さほど埋まりきらない凹地を再利用している可能性が大きい。よってこのような事例は、同一竪穴が再利用されていると判断して、１基の竪穴として認識する。

【分析２】同一竪穴の利用回数と集落における場

分析２では同一竪穴の利用回数と集落における場の関係を時間的な経過の中で観察する。分析の単位とする１基の竪穴の認定手法は分析１で説明したとおりであり、それぞれの竪穴の利用回数を、上屋が建てられた回数である上屋構築回数、すなわち同時機能と考えられる主柱穴のセット数とする。竪穴ごとの上屋構築回数を捉えて、時期ごとに竪穴の位置と竪穴利用回数を、図面上に表示する。利用回数が多い竪穴ほど外形線を太く表示することで、差異を視覚化する。同時機能と考えられる主柱穴の組み合わせは以下の方法で捉える。①貼床と柱穴の関係、主柱穴覆土内遺物、主柱穴の切り合い関係（宮坂1971）。②東京都下野原遺跡の発掘調査で用いられた主柱穴覆土の堆積状況のパターンとその評価

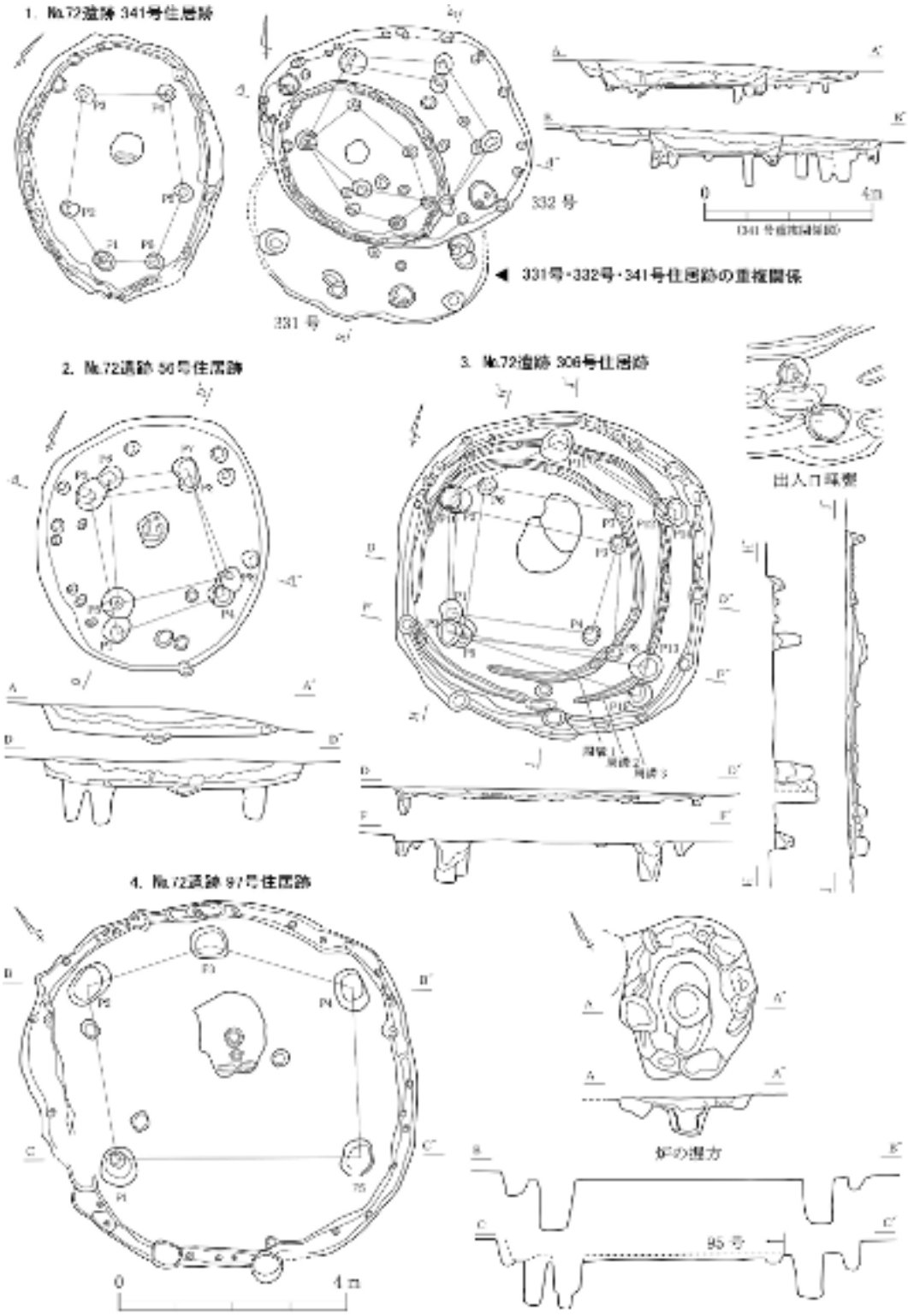



図２　竪穴の多様な利用・改変形態

(下野原遺跡発掘調査団2007)。③主柱穴直上の遺物堆積状況。④主柱穴の深さと径。記録がなく判断ができない場合は報告書記載の調査所見に従う。

竪穴の利用回数の集計方法を、具体的な事例を挙げて説明する。341号住居跡(図２－１)は１つの炉と周溝、Ｐ１～Ｐ６の主柱穴が確認される。Ｐ２～Ｐ５は深さ75～77cmであるのに対し、Ｐ１は23cm、Ｐ６は69cmとやや浅い。Ｐ２～Ｐ５が主柱穴でＰ１、Ｐ６は補助的な柱穴の可能性もある。いずれにしても上屋を建て替えた痕跡がなく、利用回数は１回である。

56号住居跡（図２－２）は主柱穴の正確な組み合わせの特定ができないが、Ｐ１～Ｐ４（深さ67～79cm）とＰ５～Ｐ８（深さ60～74cm）の２セットの主柱穴を認めることができる。よって、上屋を２度構築したことが明らかで、利用回数は２回である。

306号住居跡（図２－３）は２つの炉と、３重にめぐる３つの周溝があり、それぞれの周溝に対応する主柱穴群を認めることができる。周溝１にはＰ１～Ｐ４（深さ37～68cm)、周溝２にはＰ５～Ｐ８（深さ47～67cm)、周溝３にはＰ９～Ｐ15（深さ66～77cm）が対応し、Ｐ12、Ｐ13はそれぞれＰ14（深さ83cm)、Ｐ15（深さ48cm）に更新されたと考えられる。したがって周溝３の段階は２度の上屋の構築が想定され、306号住居跡の利用回数は４回である。

ところで、主柱穴の組み合わせが１組で建て替えがないように見えても、主柱穴が大きく、建て替えの可能性がある竪穴建物址も一定数存在する[7)]。上屋の構築回数が複数となる可能性がある一方で、１回である可能性も排除できないため、大型主柱穴を持つ竪穴は別途集計し、図上では破線とする。便宜的だが直径60cmを上回る主柱穴群を持つ竪穴を対象とする。No.72遺跡97号住居跡は大型主柱穴群を持つ竪穴建物址の事例である（図２－４)。主柱穴は１組だが径が大きく、柱の掘方の直径が90cm近くに達する。炉体土器も南西側に小型の深鉢が埋設されており、追埋設の可能性もある。厳格な原位置を踏襲した改築の場合、現象面から改築を捉えるには主柱穴の観察が必要である。97号住居跡も大型主柱穴を持つ竪穴建物址として、他の利用回数１回の事例と区別しておく必要がある。

【分析３】竪穴の重複関係の形成順序

分析３として、竪穴の重複関係の規則性の有無を検討する。環状集落址の竪穴が重複しつつ円形あるいは馬蹄形に配される以上、その重複順序にも何らかの規則が認められる可能性がある。

２基以上の竪穴が切り合う集塊状の単位を「塊状ブロック」として抽出し、重複関係の形成順序を復元する。既存の竪穴を切る竪穴の方向に対して矢印を付し、構築順序を可視化することで、形成順序を読み取る。しかし、土層断面図で新旧の検証ができるものが限

られており、調査所見に頼らざるを得ないものも多い。性質の異なる年代軸である土器型式は新旧の判断では用いないが、図中に併記する。覆土出土土器から得た竪穴の時期が、遺構調査から得た新旧の所見と矛盾する例があったが、ここでは土層断面図や遺構調査の所見に則る。

## ４．建築更新分析

### ４－１．No.72遺跡の検討

【分析１】新築の場と既存の竪穴の位置関係

本論では、No.72遺跡の南東部（調査区平面図右側）をSE群、西部（調査区平面図左側）をW群、中央北部をN群と呼称する（図３）。図４～図６に分析結果を示す。勝坂１式期から順に観察する。

**勝坂１式期**（図４－①）　竪穴がSE群にのみ分布し、SE群の北側に５基と、南側の２基が２群を呈し対峙する。重複関係を持つ竪穴は２組４基で、双円形に重複するのが特徴的である。初期の竪穴配置は環状配置をとらない可能性がある。

**勝坂２式期**（図４－②）　勝坂１式期にはなかったW群とN群も散漫に竪穴が確認できる。環状集落の「環」の基礎的な配置が見て取れる。W群の竪穴は特に調査区北側に分布し、重複関係をもたない。SE群では勝坂１式期の２つの竪穴構築の場が、本期も踏襲されている点が重要である。また、勝坂１式期と同様に双円形のブロックが形成され、３基以上

図３　No.72遺跡における勝坂1式期から称名寺Ⅰ式期の竪穴建物配置図

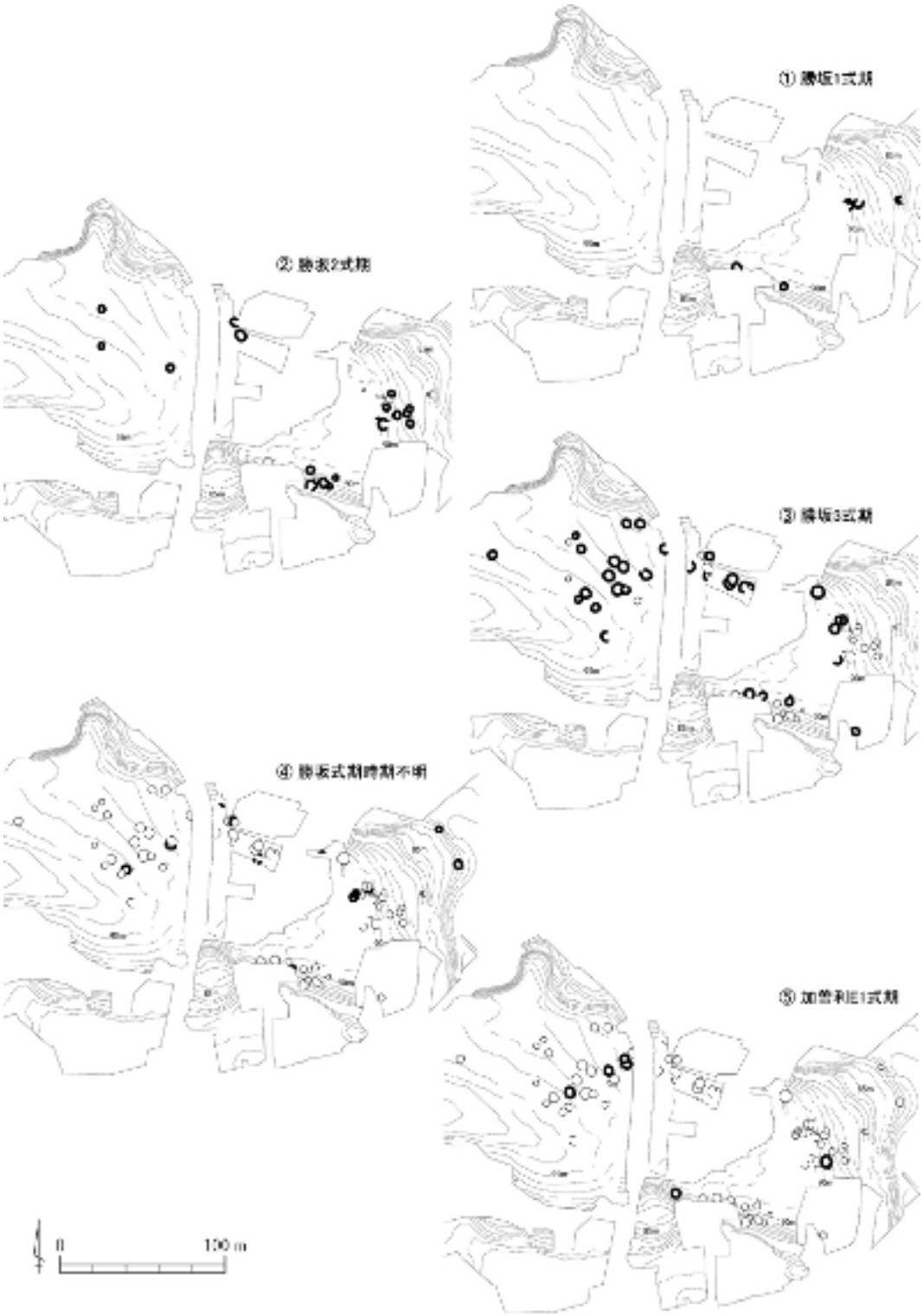



図４　分析１：新たな竪穴と既存の竪穴の場の関係（No.72遺跡）

の竪穴の重複は見られない。

**勝坂３式期**（図４－③）　SE 群で勝坂１式期から継続する２つの居住エリアが踏襲され、さらに竪穴が集中する。既存の竪穴の位置が把握され、参照されている可能性がある。竪穴の位置は勝坂２式期より集落中央へ向かうようで、SE 群にて顕著である。W群は竪穴が散開しつつも増加し、重複は低調である。そして、前段階までと同様に、W群北側を踏襲する。N群は竪穴の構築が活発化し、重複が著しい。また、本段階も含め勝坂式段階における一般的傾向として、竪穴の重複は前段階の竪穴との関係を考慮しても、２つの竪穴が切り合うことで双円形ブロックとなるものが多く、勝坂式期の１つの重複パターンとして理解すべきである。明らかに３基以上の竪穴の重複が少ない。

**加曽利Ｅ１式期**（図４－⑤）　竪穴の数が７基となるが、環状にめぐる。SE 群では、引き続き２つの居住エリアが選択される。W群でも前段階と大きな傾向の変化はない。おおよそ勝坂２式期以来の傾向を踏襲するものであるといえる。

**加曽利Ｅ２式期**（図５－⑥）　竪穴の数が全段階を通して最も多い。SE 群では引き続き北側と南側の２群周辺に、重複を伴う竪穴の構築が継続する。この集落最初期からの居住エリアに対し、その中間エリアに新たな居住単位が形成される。この新興の居住単位は複雑に重複しつつ、巨大な塊状ブロックを短期間に形成している。SE 群は弧状の配置を見せるようになる。W群はこれまでと同様に、SE 群に対して重複が少なく、４基以上の大きな塊状ブロックの形成は認められない。疎らな竪穴配置が特徴で、その傾向は勝坂式期より継続するものである。N群は SE 群の様相と近似し、複数基以上が重複しつつ展開する。本段階で注目したいのは竪穴の選地である。いずれの位置も同様に、既存の竪穴より内側に構築の場が選択される傾向にある[8)]。そして SE 群とW群の大きな違いは、SE 群が重複しつつ内縮するのに対し、W群は重複を避けるように内縮することである。W群は同時に、竪穴構築の場が南側へ移る傾向にある。時期不明の竪穴が南側に多い（図６－⑪）ことを考慮する必要があるが、加曽利Ｅ２式期にW群の北側が低調になることは確かである。

**加曽利Ｅ３式期**（図５－⑦）　この段階はさらに竪穴の内縮が進む。SE 群では、勝坂１式期から加曽利Ｅ１式期にかけて踏襲されてきた２大群も、加曽利Ｅ２式期に認められたその中間の居住エリアも、同様に継続される。N群と SE 群は加曽利Ｅ２式段階までの竪穴建物址群の輪郭に沿い、重複するように竪穴が構築される。W群では竪穴構築が極めて低調となり、３基のみしか確認できない。一方で SE 群は、加曽利Ｅ２式段階をしのぐ数の竪穴が構築される。

**加曽利Ｅ４式期**（図５－⑧）　SE 群はこれまでの内縮を踏襲した結果であろうか、いくつかの竪穴は中央広場に到達する。それに対してW群は周縁部にも展開する。その結果、疎

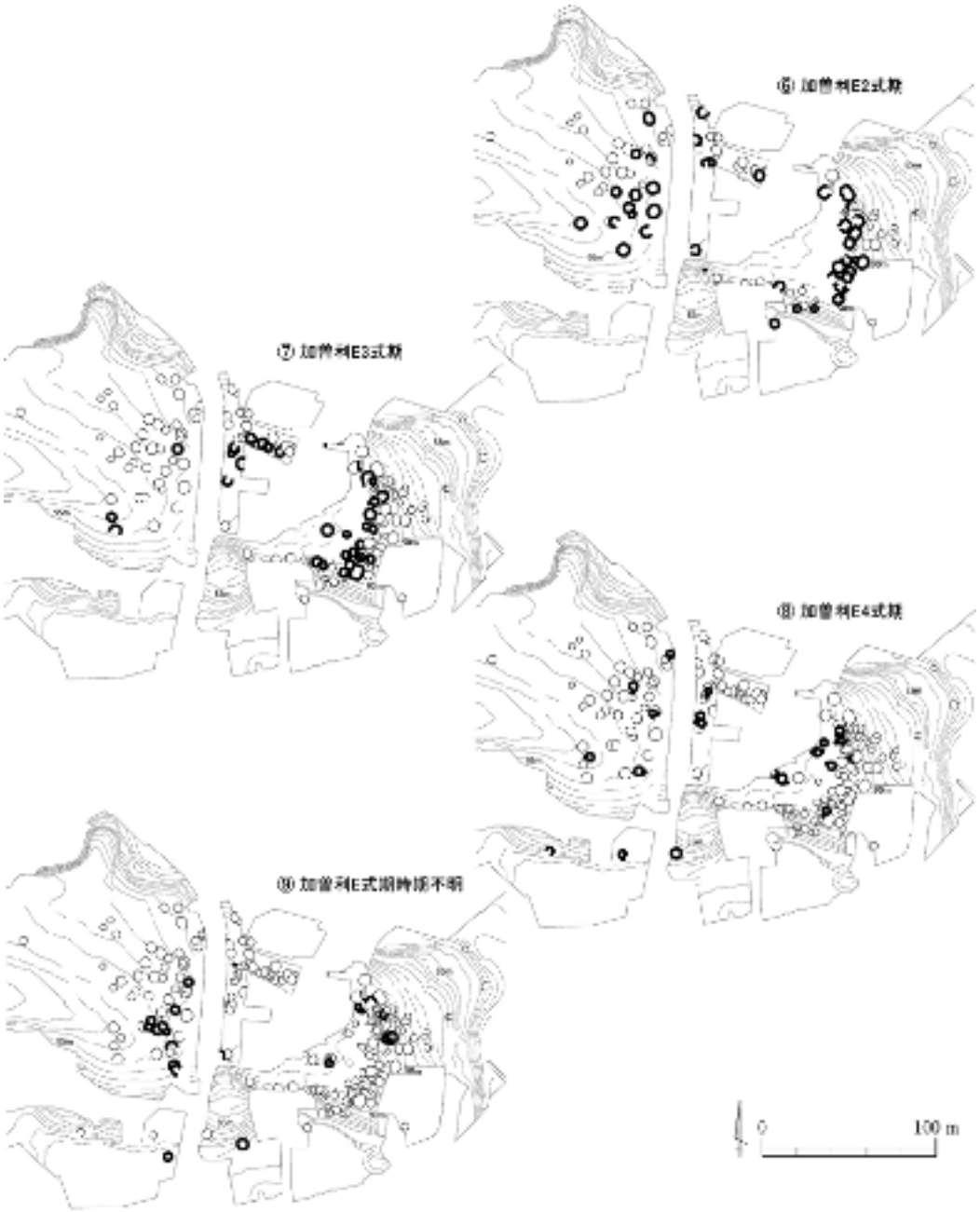



図５　分析１：新たな竪穴と既存の竪穴の場の関係（No.72遺跡）

らに散開するような竪穴配置となり、環状とはいいがたい不規則な配置となる。前段階で希薄だったW群の竪穴構築も増加する。

**称名寺Ⅰ式期**（図６－⑩）　竪穴が２基となり環を形成しない。以降は竪穴が構築されない。

以上新たな竪穴の場と既存の竪穴の場の関係を検討した。その結果明らかになったのは

次の現象である。①大きく東西で竪穴の重複の仕方が異なり、SE群・N群は重複が卓抜し、W群は低調である現象。②一般的に知られる竪穴の内縮現象がNo.72遺跡でも追認されること。特に勝坂３式から加曽利Ｅ３式期にかけて顕著に認められ、加曽利Ｅ４式期に変化すること。③SE群に開始期の異なる居住エリアが存在し、その場が時間を超えても踏襲されること。④勝坂式期は竪穴２基の重複による双円形ブロックが発達し、加曽利Ｅ２式期以降に３基以上の巨大な塊状ブロックが発達すること。重要なのは新築に選定される場が既存の竪穴との関係の中ではじめてパターン化がきる点にある。

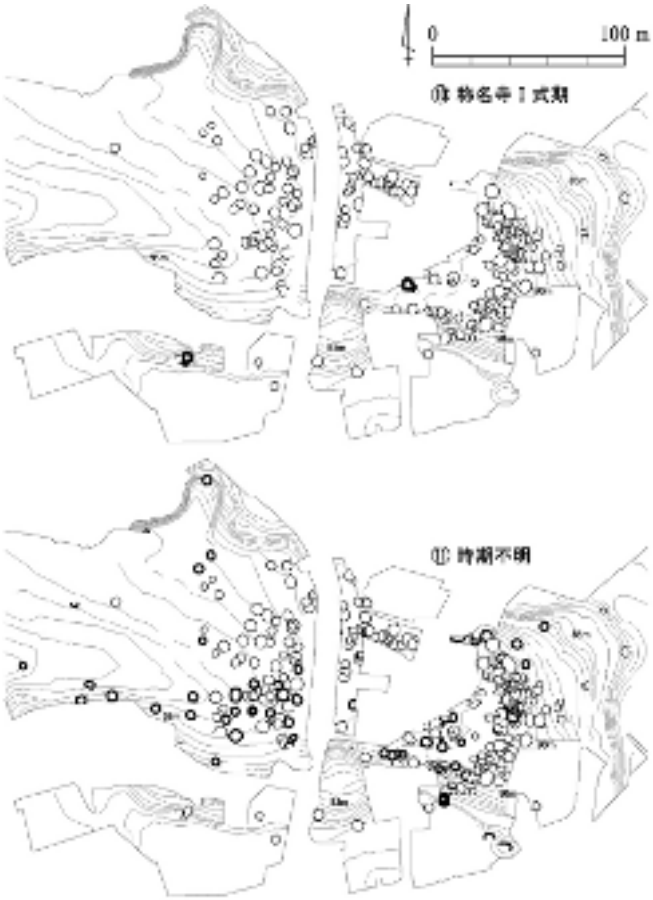



図６　分析１：新たな竪穴と既存の竪穴の場の関係（No.72遺跡）

【分析２】同一竪穴の利用回数と集落における場

図７～図10では各時期の竪穴を利用回数に対応させて外形線を太く表示している。表１は廃絶時期別の同一竪穴利用回数、表２はそれをセリエーショングラフにして変化の動態を可視化した。これらを基に、各利用回数の竪穴が各時期に環状集落址のどのような位置に展開するのかを観察する。

**勝坂１式期**（図７－①）　SE群の２つの居住エリアに選地する本段階は、利用回数に偏りはなく１回と２回のいずれかで、比較的低調である。

**勝坂２式期**（図７－②）　前段階以来の低調な利用回数が継続する。場ごとの大きな差異は認められず竪穴の利用回数は１回から３回ほどである。

**勝坂３式期**（図７－③）　いずれの場も竪穴の利用回数が増加する。勝坂１式期から継続するSE群の２つの居住エリアは引き続き均衡を保ちつつ、利用回数がやや増加するようである。N群とW群は利用回数が多い竪穴が多数認められ、特にW群はSE群を圧倒する。

大型主柱穴を持つ竪穴もW群に集中する。N群に位置する利用回数が６回以上の竪穴やW群の８回以上の竪穴の周辺には、利用回数が３回から４回の竪穴が認められる。

**加曽利Ｅ１式期**（図８－⑤）

竪穴の数は少ないが利用回数は比較的多い。竪穴の数はW群が優勢だが、SE群は利用回数が４回のものが存在する。

**加曽利Ｅ２式期**（図８－⑥）　W群とN群は竪穴の再利用がSE群に対して活発で、勝坂３式期からの傾向を踏襲する。特に環の外縁部に位置する竪穴ほど利用回数が多い傾向がある。SE群では勝坂１式期から継続してきた２つの居住エリアの中間域に、新たな居住エリアが形成され、利用回数が多い竪穴も含まれる。

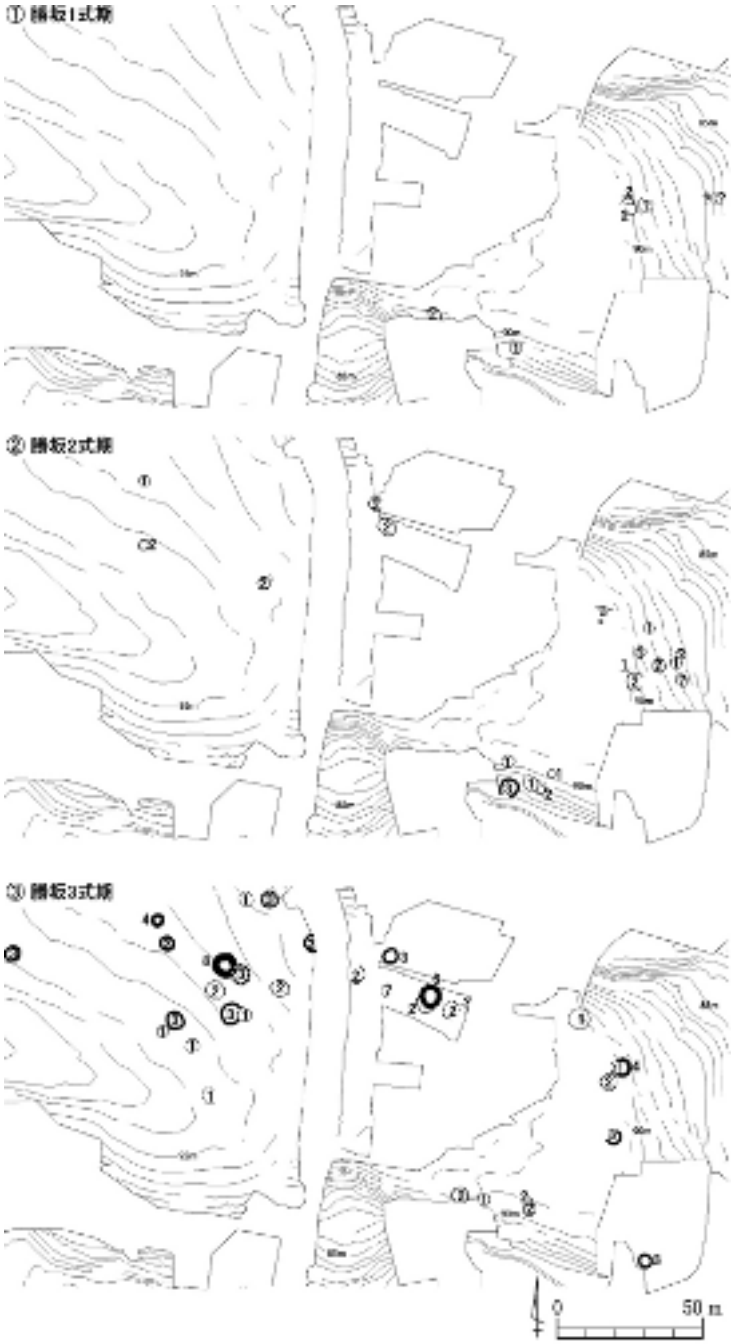



図７　分析２：同一竪穴の利用回数と場（No.72遺跡）

**加曽利Ｅ３式期**（図９－⑦）　前段階まで利用回数が多い竪穴が集中したW群では竪穴の数が減少し、利用回数も激減する。一方でN群とSE群は竪穴の数が加曽利Ｅ２式期以上になるが、全体的な傾向としては利用回数の多い竪穴が大きく減少する。

**加曽利Ｅ４式期**（図９－⑧）

この段階は竪穴建物が柄鏡形敷石住居に置き換わる。竪穴の再利用は低調で、多い場合でも数回である。そもそも、主柱穴のセット関係の把握が困難な場合も多い。

**称名寺Ｉ式期**（図10－⑩）

利用回数は２回までであり、利用回数の多い竪穴は認められない。

ここまでに、竪穴の利用回数の分析を試みた。その結果をまとめると次のようになる。①時間的傾向として、勝坂３式期から加曽利Ｅ２式期までに利用・廃絶された竪穴は、利用回数が比較的に多い。利用回数が３回、４回を超える竪穴も少なくない（表２）。②場の傾向として、利用回数の多い竪穴はW群・Ｎ群に立地する。重要なのは、竪穴の再利用が多いのは、勝坂３式期から加曽利Ｅ２式期という「時間」と、W群・Ｎ群という「場」に規定される傾向である。時期不明竪穴の分布（図10－⑪）も、この傾向を否定しない。

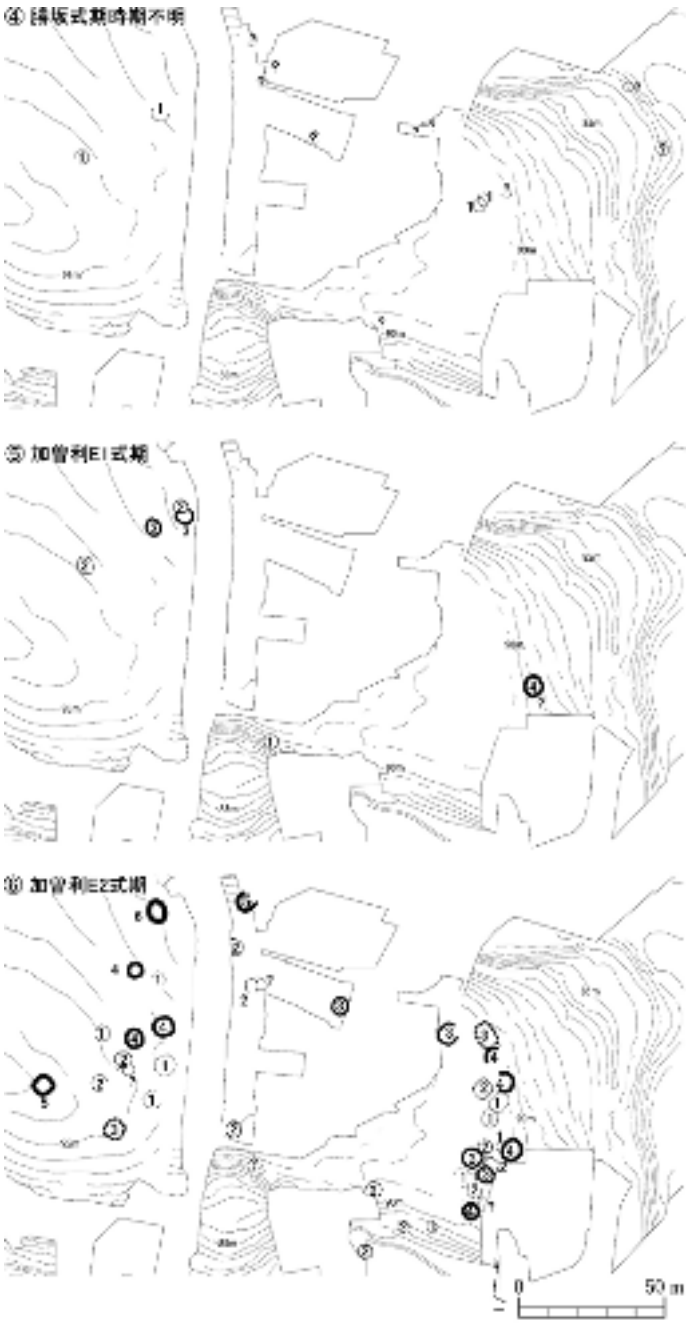



図８　分析２：同一竪穴の利用回数と場（No.72遺跡）

【分析３】竪穴の重複関係の形成順序

ここでは竪穴の重複順序の分析をする。「塊状ブロック」の重複順序を示したのが図11、図12である。一見して、多数存在する大型のブロックに、竪穴が鎖状に連続的に重複して

ゆく様子が観察される。ブロック１では222号→218号→215号→219号→214号の系列が大きい。ブロック２の83号→51号→52号→49号→57号→45号の系列や、84号→48号→47号→124号→125号の系列、さらに、150号→66号→65号→64号の系列も順次更新されてゆく。ブロック10は97号→95号→99号の系列や、97号→127号→87号の系列、97号→127号→94号の系列など小型の列状の単位からなる。ブロック12は154号→143号→15号→17号→16号の系列がU字型に連続するように形成される。ブロック21は184号→173号→188号、178号→179号→188号、160号→179号→188号の小型の列状の系列が認められる。ブロック33は345号→321号→322号→320号の系列が認められる。その他にも３つの竪穴が連続的に切り合う小型の単位は、ブロック３、ブロック８、ブロック13、ブロック25、ブロック26、ブロック28、ブロック31に認められる。

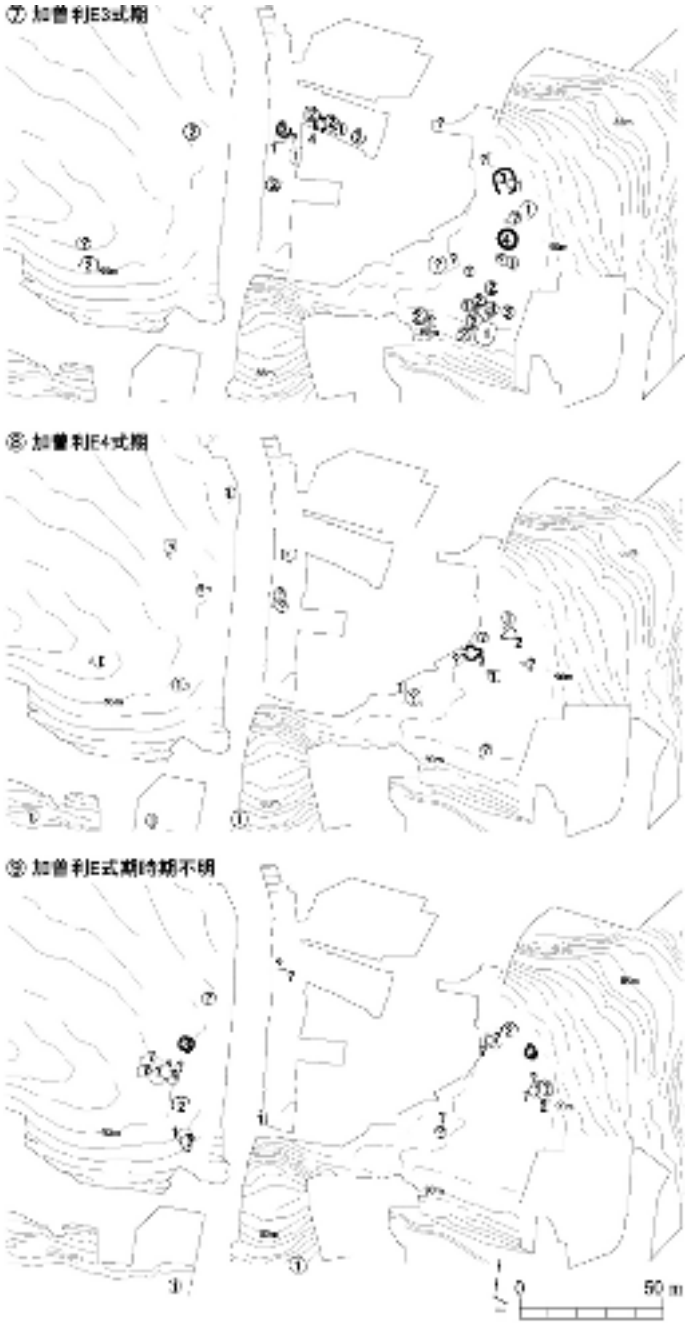



図９　分析２：同一竪穴の利用回数と場（No.72遺跡）

このように、竪穴が鎖状に重複する現象は、１つのパターンとして捉えられる。これを「鎖状更新パターン」と呼称したい。鎖状更新パターンは、特にN群とSE群に顕著に認められる。また、ブロック２のように内縮がブロック単位で認められる一方で、ブロック

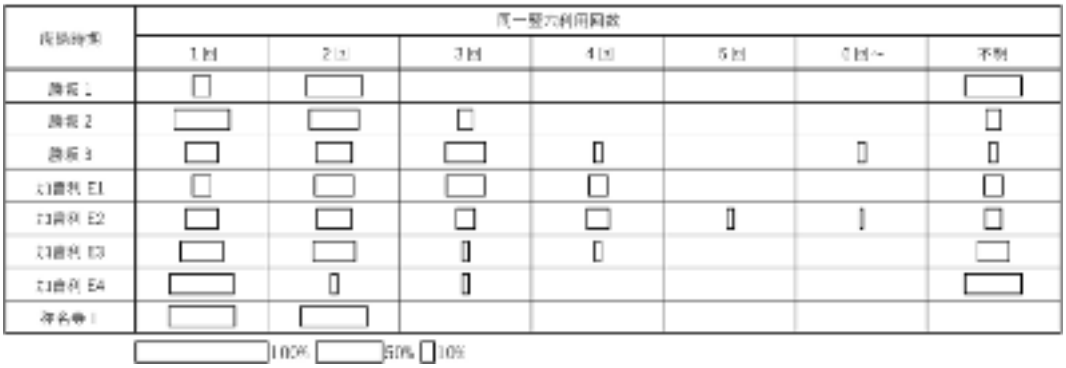
図10　分析２：同一竪穴の利用回数と場 (No.72遺跡)

表１　廃絶時期別の同一竪穴利用回数

| 同一竪穴利用回数 | 竪穴の廃絶時期 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 称名寺1 | 称名寺2 | 称名寺3 | 称名寺不明 | 加曽利E1 | 加曽利E2 | 加曽利E3 | 加曽利E4 | 加曽利E不明 | 称名寺１ | 時期不明 | 合計 |
| 1回 | 1 | 5 | 8 | 4 | 1 | 13 | 12 | 10 | 4 | 1 | 16 | 75 |
| 2回 | 3 | 7 | 9 | 0 | 2 | 11 | 12 | 1 | 4 | 1 | 10 | 60 |
| 3回 | 0 | 2 | 10 | 0 | 2 | 6 | 2 | 1 | 2 | 0 | 3 | 28 |
| 4回 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 7 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| 5回 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 6回 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 7回 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 8回以上 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 不明 | 3 | 2 | 2 | 10 | 1 | 5 | 9 | 9 | 16 | 0 | 38 | 95 |
| 大型土坑 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 13 |
| 合計竪穴数 | 7 | 19 | 33 | 14 | 7 | 42 | 37 | 21 | 26 | 2 | 67 | 275 |
| 合計竪穴利用回数 | 10 | 30 | 80 | 14 | 16 | 99 | 89 | 24 | 34 | 3 | 83 | 482 |

図11　分析３：重複関係の形成順序（No.72遺跡）ブロック1～21

表２　廃絶時期別同一竪穴利用回数のセリエーショングラフ



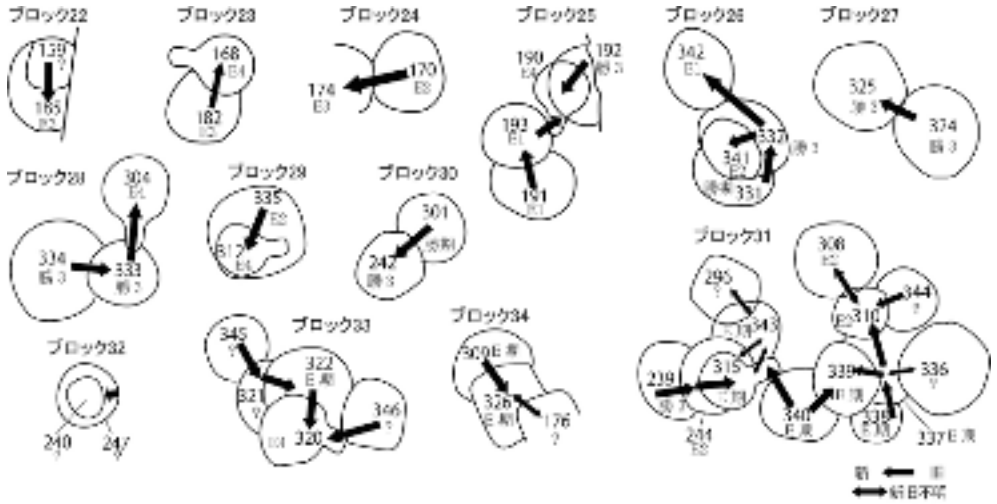



図12　分析３：重複関係の形成順序（No.72遺跡）ブロック22～34

３のように外進する事例もあり、それぞれ独自の様相を呈す。鎖状更新パターンを形成する竪穴から出土した土器型式を見ると、一型式程度の時期差に収まるものから、勝坂１式期と加曽利Ｅ２式期のように、長い断絶を挟むものも少なくない。長い断絶がある場合は偶然の所産である可能性もあるが､長期にわたって凹地が残るケースも報告されており（若林 1990)、予断はできない。竪穴の凹地が環状に廻り、集落景観の一部となっていた場合、当時の人々が新たな竪穴を構築する際に竪穴建物址との関係が問題になった可能性がある。鎖状更新パターンの成因と関連することが予想される。上野佳也の指摘のように、凹地自体が象徴的な意義をおびていた可能性もある（上野1995)。一時期の景観に凹地とその継続期間を合わせて検討する必要がある。

## ４－２．No.446遺跡の検討

【分析１】新築の場と既存の竪穴の関係

図13に竪穴構築の場の分析結果を示す。初段階の勝坂２式期（図13－①）には既に竪穴が環状の構成をとる。しかし、その後に竪穴が認められるのは加曽利Ｅ４式期であり、居住の場としては長期間の断絶が認められる（図13－②)。加曽利Ｅ４式期は勝坂２式期の環よりも内側が選択され､現象上は内縮している。しかし大きな時間的断絶を経るために、既存の竪穴建物址の位置を意識したものであるかは不明である。

【分析２】同一竪穴の利用回数と集落における場

図14に同一竪穴利用回数の分析結果を示す。勝坂２式期（図14－①）は北側に比較的利用回数の多い竪穴と大型主柱穴を持つ竪穴が立地するが、最大でも３回であり、総じて竪

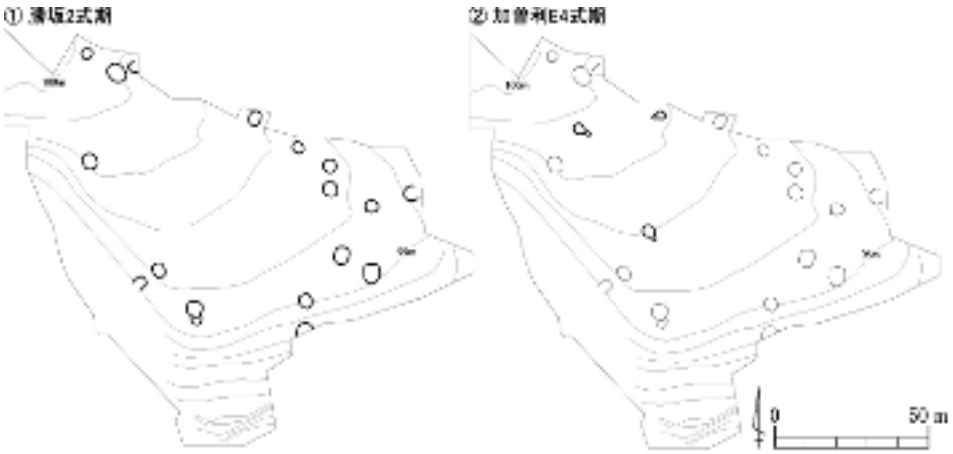



図13　分析１：新たな竪穴と既存の竪穴の場の関係（No.446遺跡）

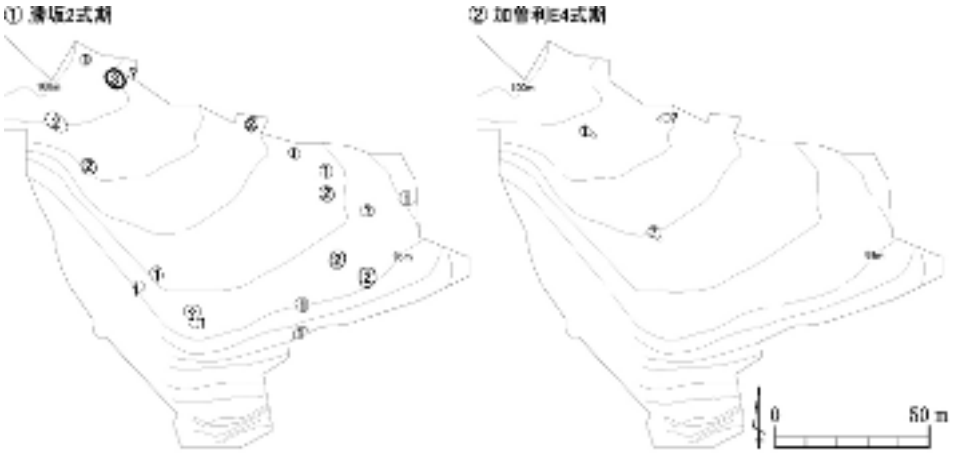



図14　分析２：同一竪穴の利用回数と場（No.446遺跡）

穴の再利用の回数は少ない。集落内で大きな差異は認められない。加曽利Ｅ４式期（図14－②）も、竪穴の再利用は低調である。

【分析３】竪穴の重複関係の形成順序

図15に竪穴の重複関係の形成順序を示す。竪穴の重複は１例のみである。時期はいずれも勝坂２式期だが新旧は不明である。同時期のNo.72遺跡よりも重複が希薄である。重複がほとんど起こらないことが特徴である。

図15　分析３：重複関係の形成順序（No.446遺跡）

## ３－３．No.446－Ｂ遺跡の検討

No.446－Ｂ遺跡は加曽利Ｅ２式期に限定される集落であることから、竪穴構築の場の分析（分析１）が行えない。よって竪穴利用回数分析（分析２）・重複順序分析（分析３）へ進む。

【分析２】同一竪穴の利用回数と集落における場

No.446－Ｂ遺跡における同一竪穴利用回数の分析結果が図16である。北側には利用回数が４回の竪穴が認められる。南側は北側よりも竪穴が多いが、利用回数は総じて少ない。また全体的な傾向としてNo.72遺跡よりも竪穴の利用回数が少なく、５回以上利用された竪穴が認められない。No.72遺跡のような、大規模環状集落址ほど竪穴の繰り返しの利用が多くなる様相が捉えられている。

図16　分析２：同一竪穴の利用回数と場（No.446-B 遺跡）

図17　分析３：重複関係の形成順序（No.446-B 遺跡）

【分析３】竪穴の重複関係の形成順序

重複関係の形成順序を示したのが図17である。北側は竪穴の重複が認められない。その一方で南側に７基３組の竪穴の重複が認められ、北側に対して重複が活発である。一方でNo.72遺跡に認められたような鎖状更新パターンが認められない。

## ５．考察

### ５－１．No.72遺跡の分析結果の整理と考察

まず、No.72遺跡の分析で明らかになった現象を整理し、その意味について考察したい。

新築の場と既存の竪穴の位置関係の検討（分析１）から、次の現象が明らかとなった。

① 重複がN群とSE群に卓抜し、W群は低調である現象。

② SE群の勝坂式期では２つ、加曽利Ｅ式期では３つの分節的な居住エリアの存在。

③ 勝坂３式期から加曽利Ｅ３式期の竪穴の内縮現象。

①は勝坂３式期から加曽利Ｅ３式期にかけて長期的に維持される傾向である。SE群では古い竪穴が重複を受けて大型のブロックが形成される一方で、W群では低調である。

②は勝坂１式期から継続されてきた２つの居住エリアと、その中間領域に加曽利Ｅ２式期までに形成された居住エリアの存在から、分節的な単位の存在を読み取ったものである。過去の場を踏襲し続ける開始期の異なる分節的単位の存在が集落址の形成過程の分析から証明され、谷口が明らかにした環状集落を複数のセクションに区分する「分節構造」（谷口1999、2005）に対応する。一方でW群には分節的な単位を認めることはできない。

③はNo.72遺跡の竪穴の場が、時期を経るにしたがい中央に収斂していく様相を読み取ったものである。竪穴の構築の場の内縮は、丹羽祐一の分析（丹羽1978）以降多くの事例で追認されており、本遺跡でも分析から捉えることができた。その一方で、W群ではむしろ加曽利Ｅ２式期の南進が特徴的であり、SE群の顕著な内縮とは一線を画す現象である。新しく竪穴を掘る場に対して、SE群とW群で独自の更新行為が時期を隔てて維持されていることが読み取れるのである。

分析２では竪穴利用回数と場の関係の変遷を分析した。その結果明らかとなった現象は次のとおりである。

ａ．勝坂３式期から加曽利Ｅ２式期にかけて竪穴の再利用が著しいこと。

ｂ．各期でW群、N群、SE群の利用回数が多い竪穴を比較すると、W群・N群の方が多い傾向にあること。

ａは勝坂３式期から加曽利Ｅ２式期の竪穴再利用に対する志向性と、加曽利Ｅ３式期の

転換を示すものである。加曽利Ｅ１式期と加曽利Ｅ３式期の最大竪穴利用回数は同程度だが、２回以下と利用回数の少ない竪穴が加曽利Ｅ３式期に急増しており、性質が異なる。竪穴建物址が蓄積されている加曽利Ｅ３式期にあえて既存の竪穴を再利用しない現象は、加曽利Ｅ３式期における建築更新の変質を示すものである。これは東京都下野原遺跡で見出された「踏襲的モード」から「便宜的モード」への変化（谷口 2007）を追認するものである。

ｂは竪穴構築の場の分析（分析１）の結果と対応しており、〈竪穴の重複が著しく再利用が低調な SE 群〉・〈竪穴の重複が低調で再利用が顕著なＷ群〉という、SE 群とＷ群で異なる建築更新の様相を見るものである。谷口は長野県大石遺跡で集落を構成する２大群の建築更新の異質性を捉えており（谷口2005)、類似の現象として注目する。また利用回数の多い竪穴は、大型の塊状ブロックに含まれることが少ない傾向にある。

分析３では塊状ブロックに見られる竪穴の重複順序を復元し、鎖状更新パターンを捉えた。これは、西澤明が東京都向郷遺跡で明らかにした環状土坑群の形成過程（西澤2002）と共通の現象であり、No.72遺跡と隣接する No.107遺跡の環状土坑群でも顕著に認められる。鎖状更新パターンは、竪穴建物と環状土坑群の関係解明のための重要な手掛かりとなろう。

ここまでに No.72遺跡の建築更新を分析した結果、居住の場を踏襲する分節的な単位や、東西で異なる竪穴の利用形態、鎖状更新パターンが、時間を経てもなお継続して認められた。これらは、既存の竪穴建物址と新たな竪穴建物の連鎖的な関係の中で捉えられた現象である。当時の人々が過去の竪穴と場、そして更新の規則を意識し、継承していた可能性がある。

### ５－２．建築更新と集落間関係―No.72遺跡と No.446・No.446－Ｂ遺跡の比較―

**【勝坂２式期における No.72遺跡と No.446遺跡】**（図７－②、図14－①）　この段階は、No.72遺跡では竪穴配置が勝坂１式期の分節的な単位を踏襲している。SE 群では勝坂１式期に対して比較的に重複が多い。一方で No.446遺跡は No.72遺跡より竪穴の展開範囲が狭く、重複が南側斜面下方の２基にとどまる。両遺跡の重複状況には差異がある。それが何に起因するのかは即断できないが、小林達雄は重複の背景に土地の領有と居住者の力関係を見る（小林1996、1999)。そして No.72遺跡の重複現象は、谷口による「分節構造」に対応する分節的な単位の中で生起する。これは超世代的に維持される分節構造を生み出した社会背景が、重複現象にも一定の規則を与えたことを推察させる。次に同一竪穴の利用回数に着目する。No.72遺跡、No.446遺跡ともに古い竪穴の再利用は低調である。No.72遺

跡では利用回数の多い竪穴が斜面下方の集落東側に存在する一方で、No.446遺跡は斜面上方の集落北側に分布する点に若干の相違があるものの、竪穴の利用回数が双方多い場合でも３度であり明瞭な差とは言えない。むしろ、いずれも竪穴の再利用が低調であり、その点が共通する。

**【加曽利Ｅ２式期におけるNo.72遺跡とNo.446－Ｂ遺跡】**（図８－⑥、図16）　この段階のNo.72遺跡の建築更新とNo.446－Ｂ遺跡の建築更新は、分析結果を総合し比較することで、近似する事実が明らかとなる。それは、〈竪穴再利用多＋重複少〉・〈竪穴再利用少＋重複多〉という集落を二分する構造と、それを踏襲する集落形成である。〈竪穴再利用多＋重複少〉はNo.72遺跡ではW群が該当し、No.446－Ｂ遺跡では環の北側が該当する。〈竪穴再利用少＋重複多〉はNo.72遺跡ではSE群が該当し、No.446－Ｂ遺跡では環の南側が該当する。それをおさえつつ斜面地形と建築更新の関係に注目すると、それぞれの集落址の共通性を捉えることができる。すなわち、両集落址共に斜面上方側に再利用の顕著な竪穴が集中し、斜面下方側は竪穴の再利用が比較的低調で重複が多いのである。顕著ではないものの、この傾向はNo.446遺跡にも共通する。つまり、〈斜面上方：竪穴再利用多＋重複少〉・〈斜面下方：竪穴再利用少＋重複多〉の構図が共通しており、これが更新の規則と考えることができる。このように、それぞれの類似性は集落の立地する微地形との関係で理解することができる。

**【加曽利Ｅ４式期におけるNo.72遺跡とNo.446遺跡】**（図９－⑧、図14－②）　どちらの集落址も建築更新の２大群は認められず、竪穴利用回数も少なくなる。竪穴建物は柄鏡形敷石住居に置き換わり、環を踏襲せず中央広場にも進出し、No.72遺跡においては外縁部にも分布する。柄鏡形敷石住居の中央広場への進出が内縮現象の延長か否かは判断しかねる。いずれにしても両集落址ともに旧来の更新パターンが踏襲されず、建築更新上の大きな画期となる。

No.72遺跡とNo.446・No.446－Ｂ遺跡の比較から〈斜面上方：竪穴再利用多＋重複少〉・〈斜面下方：竪穴再利用少＋重複多〉という建築更新の共通性を捉えた。特に、No.446－Ｂ遺跡は同時期のNo.72遺跡と類似した建築更新をとることが明らかである。No.446－Ｂ遺跡はNo.72遺跡の過去（勝坂３式期前後）から続く規則を継承しつつ建築更新が行われた可能性がある。

## ６．結 論

ここまでの分析と考察から、No.72遺跡では居住の場を踏襲する分節的な居住エリアや、

東西の建築更新の差異、鎖状更新パターンが時間を超えて維持されることを明らかにした。建築更新に規則的なパターンが認められることから、当時の人々は既存の竪穴と場、更新の規則を継承し、参照していた可能性がある。環状集落に居住することは、当事者たちが構築した建築物とあわせて、先人の痕跡に囲まれて暮らすことに他ならない。そして、集落に居住する人々は建物の修復や廃絶、さらには累積する既存の建築物や構築物の痕跡と重複を繰り返すことにより、旧時の構築物と関わりを持つ。改築や重複とは既存の建築物やその痕跡を改変する行為であり、当事者が旧来の構築物を意識する機会となる可能性がある。

今回の事例分析をもって環状集落全般に敷衍することはできないが、旧来の構築物に対する改変行為の結果である改築や重複といった現象が一定のパターンを持つことは、それが当時の人々の判断と行為の累積である以上、改築・重複行為にも規則が与えられていた可能性がある。そのような規則的な更新行為が、No.72遺跡における環状集落址の形成に寄与したと解釈する。さらに、No.446－B遺跡は特にNo.72遺跡と共通の建築更新をとることから、No.72遺跡を形成した建築更新の規則は、No.446－B遺跡の集落形成にも大きな影響を与えていたと考えられる。環状集落は1つで完結する性質のものではなく、近接する集落と相互に関連し連動する性質のものであったといえよう。

なお本論は建築更新の分析のうち、集落における場の更新の分析方法を提示することを意図したものである。竪穴の利用形態を数値に置き換えて操作したために、更新の質的な部分の検討を提示できていない。今後の課題として、稿を改めて竪穴建物址そのものの建築更新の分析と結果を報告する。

## 註

1．水野正好は竪穴建物利用の継続性を重視し、竪穴建物の「位置をうごかして新たに作り替える」現象を「新築」、「その位置で構築を改めなおす」現象を「建て直し（改築）」とした（水野1969）。本論では水野にしたがい、新しく竪穴プランを掘り直す現象を「新築」、拡張や柱の交換、炉の再構築などの竪穴建物の継続的な利用を「改築」と定義する。また、新築の場が重なり遺構が切り合う現象を「重複」、同一竪穴の継続的な利用が伴う建て替えを「改築」とする。これに関連して、「竪穴建物」は建築物として建っている状態、「竪穴建物址」は竪穴建物の上屋が倒壊、或いは取り去られることで凹地化し居住機能を喪失した状態、「竪穴」は竪穴建物が1回以上構築された、地面への掘り込みとして記述する。

2．建築更新概念の背景には谷口康浩の「建物更新」（2007）と「家屋更新」（2009）がある。谷口の概念に更新過程･改変行為の連続性にパターンを析出する方法と視点を理論的枠組みに付加し、新たに「建

築更新」として概念化した。

3．多摩ニュータウン No.72・795・796遺跡を含めた遺跡群の理解には比較的近接し、環状土坑群を伴う、同 No.107遺跡との関係も検討すべきである。しかし後世の人間の活動で縄文時代の遺構の遺存状態が悪く、取り上げられなかった。

4．安孫子昭二（2011）は東側の集落を No.446遺跡、西側を No.446- B遺跡と呼称し、櫛原功一（2016）も倣う。したがって筆者もこれを踏襲する。

5．加曽利Ｅ式土器と曽利式土器の並行関係は、加曽利Ｅ１式と曽利Ⅰ式、加曽利Ｅ２式と曽利Ⅱａ式から曽利Ⅲａ式、加曽利Ｅ３式と曽利Ⅲｂ式から曽利Ⅴａ式、加曽利Ｅ４式と曽利Ⅴｂ式以降と理解する。

6．本稿では「竪穴建物」や「址」の呼称を使用しているが、遺構名称については報告書に則る。

7．石野博信は主柱穴の重複に加え、「きわめて大きいもの」を主柱の腐朽に伴う原位置の改築と考えた（石野1990）。

8．環状集落において、既存の竪穴建物址より中央広場側に新たな竪穴建物が構築される現象を、「内縮」と呼称し、記述する。

## 引用文献


赤山容造 1982「竪穴住居」『縄文文化の研究8』110-121頁、雄山閣

安孫子 昭二 2011『縄文中期集落の景観』アム・プロモーション

石井 寛 1977「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2、1-42頁、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石井 寛 1994「縄文後期集落の構成に関する一試論―関東地方西部域を中心に―」『縄文時代』5、77-110頁

石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

今福利恵 2016「土器系統からみた縄文集落―多摩ニュータウン No.446遺跡の分析―」『考古学の地平Ⅰ―縄文社会を集落から読み解く―』159-180頁、六一書房

今村啓爾 1977「称名寺式土器の研究（上）」「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』63-1、1-29頁、同63-2、110-148頁

上野佳也 1995「縄文時代の環状遺跡について」『大正大学大学院研究論集』19、71-88頁

櫛原功一 1999「曽利式土器の編年私案」『山梨考古学論集Ⅳ』143-164頁、山梨県考古学協会

櫛原功一 2016「住居型式と集落形成」『考古学の地平Ⅰ―縄文社会を集落から読み解く―』129-145頁、六一書房

黒尾和久 1988a「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454、9-21・45頁

黒尾和久 1988b「竪穴住居出土遺物の一般的あり方について―『吹上パターン』の資料論的検討を中心に―」『古代集落の諸問題 玉口時雄先生古稀記念考古学論文集』、17-36頁、玉口時雄先生古稀記念事業会

黒尾和久 1995「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）―時間軸の設定とその考え方について―」『論集宇津木台』1、11-76頁、宇津木台地区考古学研究会

小林謙一 1994「竪穴住居の廃絶時の姿―SFC 遺跡・大橋遺跡の縄文中期の事例から―」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』12-17頁

小林謙一 1996「竪穴住居跡のライフサイクルの理解のために」『異貌』15、29-42頁

小林謙一 1999「縄紋時代中期集落における一時的集落景観の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』82、95-121頁

小林謙一・大野尚子 1999「目黒区大橋遺跡における一時的集落景観の復元」『セツルメント研究』1、1-71 頁

小林謙一 2000「竪穴住居重複関係の研究」『異貌』18、28-63頁

小林達雄 1974「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93、1-14頁

小林達雄 1996『縄文人の世界』127-131頁、朝日新聞社

小林達雄 1999「縄文世界における空間認識」『祭祀空間・儀礼空間』1-32頁、雄山閣

末木 健 1975「移動としての吹上パターン」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂、明野、韮崎地内―』220-226頁、山梨県教育委員会他

鈴木保彦 1981「勝坂式土器」『縄文土器大成2』148-157頁、講談社

関野 克 1938「埼玉縣福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」『人類學雜誌』53-8、1-18頁

高橋龍三郎 1991「縄文時代の葬制」『原始・古代日本の墓制』48-84頁、同成社

谷口康浩 1998a「環状集落形成論―縄文時代中期集落の分析を中心として―」『古代文化』50-4、1-18頁

谷口康浩 1998b「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14、43-88頁

谷口康浩 1999「環状集落から探る縄文社会の構造と進化」『最新縄文学の世界』20-35頁、朝日新聞社

谷口康浩 2002「環状集落と部族社会―前・中期の列島中央部―」『縄文社会論（上）』19-65頁、同成社

谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社

谷口康浩 2007「縄文時代の建物跡をめぐる問題」『下野原遺跡』454-464頁、下野原遺跡調査会

谷口康浩 2009「縄文時代の生活空間―『集落論』から『景観の考古学』へ―」『縄文時代の考古学8 生活空間―集落と遺跡群―』3-24頁、同成社

谷口康浩（編）2012『縄文人の石神～大形石棒にみる祭儀行為～』六一書房

谷口康浩 2021『土偶と石棒 ―儀礼と社会ドメスティケーション―』雄山閣

土井義夫 1985「縄文時代集落論の原則的問題―集落遺跡の二つのあり方をめぐって―」『東京考古』3、

1-11頁

土井義夫 1988a「考古資料の性格と転換期の考古学」『歴史評論』454、1-8頁

土井義夫 1988b「『セトルメント・パターン』の再検討」『史館』20、76-85頁

西澤 明 2002「縄文時代中期における墓制の再検討」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』19、107-124頁、東京都埋蔵文化財センター

丹羽佑一 1978「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』61-2、100-138頁

水野正好 1969「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』21-3・4、1-21頁

溝口孝司 1995「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究―北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的検討―」『日本考古学』2、69-94頁

溝口孝司 1997「福岡県甘木市栗山遺跡D群墓域第6号甕棺墓：社会考古学的観点からの若干の検討」『比較社会文化』3、53-62頁

溝口孝司 2016「過去と記憶とその動員―北部九州弥生時代Ⅴ期を事例として―」『考古学は科学か 上田中良之先生追悼論文集』545-559頁、中国書店

溝口孝司 2022『社会考古学講義 ―コミュニケーションを分析最小基本単位とする考古学の再編―』同成社

宮坂光昭 1971「縄文中期集落復元の基礎的検討―住居址の改増築例―」『信濃』23-4、81-97頁

山本孝司 2017「多摩ニュータウンNo.446遺跡7次調査中期後半集落の再検討」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』111-121頁、六一書房

若林正人 1990「竪穴住居埋没過程の一考察―群馬県内の近年の調査例から―」『東国史論』5、65-84頁

## 発掘調査報告書

下野原遺跡発掘調査団（編）2007『下野原遺跡』下野原遺跡調査会

玉川文化財研究所（編・発行）2005『東京都八王子市多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡：北斜面追加調査報告』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1986「多摩ニュータウンNo.796遺跡」『多摩ニュータウン遺跡3』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1997『多摩ニュータウン遺跡―先行調査報告5』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998a『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（3）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998b『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（5）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998c『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（6）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998d『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（10）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998e『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（4）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1998f『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（7）』

東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1999a『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（2）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）1999b『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―付図編』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2003『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（20）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2004『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（15）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2005a『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（17）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2005b『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（18）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2005c『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（19）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2006a『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（16）』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2006b『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―付図編2』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2008『多摩ニュータウン No.441・446遺跡』
東京都埋蔵文化財センター（編・発行）2009『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―（14）』

## 挿図出典

図１：玉川文化財研究所（編）2005、東京都埋蔵文化財センター（編）1997、東京都埋蔵文化財センター（編）1999b、東京都埋蔵文化財センター（編）2006b、東京都埋蔵文化財センター（編）2008の原図を合成、加除筆、トレースして作成　図２：東京都埋蔵文化財センター（編）1998a、東京都埋蔵文化財センター（編）2004の原図を加除筆、トレースして作成　図３～図12：玉川文化財研究所（編）2005、東京都埋蔵文化財センター（編）2006b の原図を加除筆、トレースして作成　図13～15：東京都埋蔵文化財センター（編）1997の原図を加除筆、トレースして作成　図16～17：東京都埋蔵文化財センター（編）2008を加除筆、トレースして作成　表１～表２：筆者作成